僕が落ちて消えるまで

屋下雨宿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕が落ちて消えるまで

【Ｎコード】
Ｎ２０３２ＢＡ

【作者名】
屋下雨宿

【あらすじ】
校舎から落ちて死んでしまった生徒の話。

僕が落ちて消えるまで（1）

二人の生徒が薄暗い校舎の階段を駆け上っていく。一人は僕で、もう一人は彼女。

計一四段の階段を上りきって素早く切り返すのは先を行く彼女。名前は、佐竹鈴子（さたけすずこ）。この高校の三年生で生徒会長を務める優等生。サラサラのロングヘアーを靡かせながら、ミニスカートの中など気にせずに一段飛ばしで大胆に上っていく。

切り返しの度に、一段分ぐらい離されていくのが僕。名は芦馬圭太（あしまけいた）。同じく高校三年生。僕は生徒役員とか言う訳ではなく、ただの彼女の彼氏。うん。とてもいい響きだ。鈴子の彼氏。

まぁ、それ以外には取り立てて自慢できるような特徴がないのが特徴の普通の高校生である。

「早いって！」

「急がないと間に合わないでしょ！？」

更に速度を上げる彼女。それを見た僕は、慌ててしまい階段に足を引っ掛け倒れそうになる。

「うわっとと……」

それでも、なんとか堪えて彼女の後を必死で追う。

鈴子はそんな僕に気を配ることもなく階段を上っていく。そして、

階段を上りきるその手前ところで足を止めた。そこから遅れる事、三秒弱。彼女に追い付くと、荒くなった呼吸を整えてから、階段の途中で立ち止まった意味も知らずに、

「それで、どうするつもりなのさ？」

と言いながら、顔を上げる。そして、目の前の物体に驚愕した。

そこには壊れた机とか体育祭・学園祭の小物などが山積みにされていた。無理やりに積み上げたであろう部分もあり、ちょっと下手をしたら崩れてしまうのではないかと思うほどの不安定さ。それは僕達の侵入を拒んでいるようにすら見えるぐらいだ。

「うげ。す、進めるのか？これ」

「だから、無理してこなくてもいいのに」

鈴子は僕に気を使う様子もなく、小道具に足を掛けるとそれらを思いっきり踏ん付けて進みはじめる。僕もちょっと躊躇いながら同様にして道具の山を登り越えて行った。

僕達の目的地はその先に見える侵入禁止と書かれた扉。その向こうにある屋上だ。そして何故、屋上を目指しているのかというと、そこに一人の生徒がいるからだ。

ただいるだけなら大した問題ではない。廊下や階段を走っている僕達と同レベルの罪だろう。

しかし、今は廊下を走るとか小さな事を気にしている場合ではない。それは、今にも屋上から飛び降り自殺をしようとしている生徒がいるから。これは緊急事態なのだ。だから、生徒会長である鈴子

はこんなに急いでいる。何とかして、それを阻止しようと必死なんだと思う。

高校全体がざわついてきている感じはあるが、まだ甲高い悲鳴は聞こえてこない。まだこの先にいるはずだろう。

気持ちを入れ直して、大きめに歩幅をとった時だった、

ベキッ！

足元で嫌な音がする。次に起こるであろう事態の予測は付くが、対応は出来ない。出来た事といえば、咄嗟に目を瞑る事ぐらいだ。

足が沈む。だが、僕がそれ以上落ちて行く事はなかった。

眼を開けると、鈴子がその腕を掴んで支えているのが見える。

「あ、ありがとう」

引っ張り上げてもらった僕は、視線を逸らしながらお礼を言う。逆の立場なら格好は付くのだろうが、これじゃあ見っとも無いだけだ。

「だから無理しなくてもいいって」

「ほら、だって俺、男だし？」

「理由になってない」

些細な強がりをして見せるが、鈴子は呆れた様子で冷たく言い放つ。

「えーと、だな。大体、どうやって止めるのか考えているのか？」
「知らないわよ。でも、生徒会長として何もしない訳にもいかないでしょ！？」

扉の前まで辿り着いた鈴子は、二の腕に巻き付けられた腕章に手を添える。

「まずは対策を考えよう。可部井さんを刺激しないようにだな……」
「それじゃあ、行くわよ！」
「優しく声を掛けつつ、援軍を待とう……って、おい！」

そんな僕の話などはまるで聞かずに鈴子は勢いよく扉を開ける。夕焼けの射光が眩しくて、僕は思わず顔を逸らした。

「自殺なんてやめてこっちに来なさい！」

威勢のいい第一声を放つ。鈴子の癖なのだろうが、やや威圧的過ぎると思う。

扉の向こう、屋上のフェンスを越えた先。少しの足場とも呼ばないぐらいのスペースに茶髪の女子生徒が見えた。情報通り。名前は可部井千代里（かべいちより）。三年生。一年からずっと同じクラスで多少は話した事もあるが、目立たない地味な子だ。

可部井さんは一度鈴子のほうを向いてから、何も言わずに視線を前方に戻す。僕は扉の影に隠れていたが、僕の姿も見えたのだろうか？

「今そっちに行くから！動かないでよね！」

問答無用で駆け出す鈴子。こういう時って、ゆっくりと近付くのが正解じゃなかったっけ？

一気に距離を詰めると、フェンスをよじ登り可部井さんの隣まで行こうとする。可部井さんの注意もそちらに向けられており、鈴子から離れるように後退る。

今のうちに気付かれないように背後に回り込もう。僕も足を動かしはじめる。きっと何か出来る事があるはず。何かの役に立つはず。やればできるはずだ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2032ba/

僕が落ちて消えるまで

2012年1月5日01時46分発行